第4号

愛鳥教育

1981 7月

〒150 東京都渋谷区南平台町8－20 (財)日本鳥類保護連盟内 愛鳥教育研究会

愛鳥教育 第4号によせて

会長 田村活三

昭和56年5月30日(土)、新装になった国立自然教育園をお借りして研究会並びに総会を開催いたしました。参加者は少なかったのでしたが、出席の方は皆熱心な推進者で、ご遠方からの先生も見えましてご苦労様でした。

まず千羽晋示先生より自然教育園の野鳥の習性動行、それに長年の深い研究について変遷や消長を興味深く伺い、次に矢野 亮先生から園内の植物について実地に観察や指導法を伺いました。児童生徒教育の上で、自然をみつめる－自然に親しむ－そして自然を知ることが重要かつ根本であるということを改めて深く悟り大変有益でした。

次に昼食をはさんで研究発表「本校の愛鳥活動」栃木県茂木町立千本小学校・片岡一郎先生より伺いまして学校全体がご熱心に適格に研究を進められておりますのに感心いたしました。

最後に座を改め本年度の総会にうつり、会計報告、意見交換の形で新年度の方針今後の進め方について話し合い、その中で7月・11月に会報を刊行してPRを兼ね本会の普及発展を計ることときめました。

申しおくれましたが開会に当り鳥類保護連盟常務理事鈴木秀男先生より来賓のご祝詞を頂きました「今日的にこの会の使命を痛感し、会を育てなければならない」旨のお言葉を頂きました。現に前年度会計において多額の助成をいただいておりまして、私はほんとにありがたく力強く感じました、が同時に本会発展に関し使命と責任を強く感じました。

また、三月発行の第3号を読みまして、各地で長い間、愛鳥教育に献身的な努力をされて成果を上げていらっしゃる方々に深く敬意を捧げます。そして、この皆様を見習っていただいて、活動の輪を広げていただきたいと思います。

第4回 愛鳥教育研究会の報告

昭和56年に入って初めての研究会を東京・目黒自然教育園において開きました。講演下さいました教育園の千羽晋示先生、研究発表に遠路かけつけて下さった千本小学校の片岡一郎先生に厚くお礼申し上げます。

日時 昭和56年5月30日(土)午前10時－午後4時

場所 国立科学博物館附属自然教育園

内容 1)挨拶 愛鳥教育研究会会長 田村活三
日本鳥類保護連盟専務理事
鈴木秀男

2)講演「自然教育園の野鳥」
自然教育園研究員千羽晋示先生

3)園内実習

4)研究発表「本校の愛鳥活動」
栃木県千本小学校 片岡一郎先生

5)総会

6)意見交換会

当日は、快晴のよい天候でしたが、風が強く、鳥の影はあいにくと少ない日となりました。しかし、園内の植物を観察したり、探鳥コースの選択についての助言もありといった実習と講演、発表と充実した1日でした。会場をご提供下さいました国立自然教育園森永園長、参加の皆様にお礼申し上げます。

以下はその時の講演と研究発表の要旨です。

講演

「自然教育園の鳥」

自然教育園研究員　千羽晋示

東京都港区にある自然教育園は、都市内に残存している20ヘクタールという狭い自然林としては比較的鳥が豊富にすんでいますが、一方ではスズメやハシブトガラスといった人間の居住地と結びつく種類が増加し、自然教育園内外の環境がいちぢるしく変化してきていることを示しています。

都市的鳥種としては、スズメ、ハシブトガラス、ムクドリ、オナガ、キジバト、シジュウカラ、ヒヨドリなどがあげられますが、将来的には、これらの鳥種が増加する傾向で、種類相の単純化がおこり、オナガ、キジバトの留鳥化、カワセミ、ヤマガラ、アカゲラなどの漂鳥性の鳥の減少、カケス、ノスリなど冬鳥の減少、イソシギ、オオルリなど旅鳥の減少がみられるため、これら、冬鳥、旅鳥に役立つ環境作りと維持に努めています。

また、教育園では一般公開にともなって日曜講習を行なっています。これは生物群集と無機的環境を結んだ生態系をとらえた講習内容で、実際にみられる季節の植物や昆虫から、食物連鎖へ結びつけた話です。

自然教育園の場合、高次の消費者がヘビでありそれ以上高次の動物はみられません。つまり、生態系を生物ピラミッドとしてとらえると、都市化されているほど、段階が少なく、自然環境が保たれている所では、より多くの段階があるのが普通です。

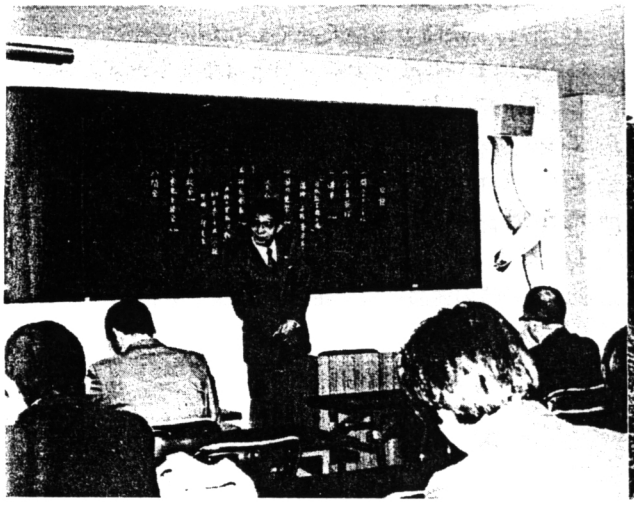
そこで江東区の木が数本しかはえていない「錦糸堀公園」及び都市内に残されている「自然教育園」、森林としての農林省林業試験場の「浅川実験林」の以上3ケ所を、緑の少ない所、中間、多い所の代表として選び、同一小面積における植物、こん虫、鳥、イヌ、ネコ、まで含めた調査を行ないました。3ケ所のフードチェーンを比較すると、地域の環境がどのように保たれているかが全体的にとらえられるので、環境のどの要因がなくなると、どの生物がいなくなってくるのかがはっきりとわかってきます。もちろん、このような調査は単独では、行なえないもので、調査チームを組んで実施しました。

愛鳥教育といっても、特に鳥にこだわらず、何らかの形で鳥について調べる時には、なるべく鳥に関わっている生物についても調べるようにしたらよいのではないでしょうか。先生方の勉強にもなるし、子供たちにも理解させやすいようです。

－自然教育園の鳥－

自然教育園での鳥の調査研究は、この地が史蹟として古い歴史をもち、自然要素が温存されていたにもかかわらず、特異な管理形態をたどってきたため古い記録はほとんど見あたりません。

1949年に開園されてから、1960年までが教育園の第一期とすると鳥類の資料は初歩的であり、第2期（1960～1965年）に高野伸二氏によって年間170日におよぶ調査が実施され、ほぼ鳥類群集の様子が把握されました。さらにその後の調査から確認記録、主な生息域、季節変動など、年間の生



息表、分布図を作成しています。とくに出現頻度、鳥相内優占度などから比較した結果、園は比較的豊富な鳥相を示していて、その存在価値を知らせるとともに、一方ではスズメやハシブトガラスといった人間の居住地と結び付く種類が増加し、園内外の環境がいちぢるしく変化してきたことがわかってきました。

また、園の外周で高速道路が昭和41～42年に建設され、開通以後の第3期には、いろいろな角度から自然教育園の鳥類に関する検討がなされました。その一例として、シジュウカラの繁殖個体数（つがい）の変動をみますと、昭和36年に36つがいいたものが、工事直後の昭和46年には、22つがいに減少し、その要因は道路の完成、高層ビル化など周辺地域の変化によるものと考えられます。最近は以前と同数位、繁殖していますが、面積が減少した分、過密状態にあり、高速道路をとびこえてナワバリをもつ個体もみられ、かなり、都市の鳥はムリをしているようです。

教育園でみられる鳥101種の目録の一部を最後に例として示しました。この目録は、鳥類名と分類学名だけでなく備考を多く記載するようにしました。こういった細かい点の記述は、年間の変動とか、何年後には別の場所に、といった過去との比較などの時に非常に役立ちます。

調査の記録は、鳥の種類、個体数だけでなく、調査した回数の中で何回みられたかという出現頻度などもとるようにすると、地域で見られた鳥がどの程度の確率ででるかまでわかってきます。例えば、教育園ではヒヨドリは1970年以前には10月～翌年5月までの期間にしかいませんでしたが、以後は夏でも出現頻度は低いが見られるようになり、1975年頃からは、一年中、出現頻度が高く、留鳥となったことがわかりました。

自然教育園の鳥類（目録抜粋）

シジュウカラ科　PARIDAE

シジュウカラ科（PARIDAE）　4種

シジュウカラが留鳥として周年生息し、繁殖している。

この種の繁殖個体数の変動については、1961年（37）、1962（36）、1963（33）、1967（25）、1968（25）、1969（23）、1970（23）、1971（22）と高速道路の完成とともに外側の個体が減少するにともない、全体としても減少がみられ、逆に、1つがいあたりのテリトリーの広さが、0.8haから1.2haに広がっている（樋井他：1972）。

しかし、1976年の調査では、繁殖個体数が1961年の時点に回復しているように推察される（千羽：八木：未発表）

ヤマガラは、1965年の時点で密度高く出現していたが、その後減少し、あまりみられていない。多くは単独で飛来する。

他のカラ類は稀である。

コガラ　*Parus montanus restrictus Hellmayr*

4・Ⅳ・1959（東京支部調53）

ヒガラ　*P. ater insularis Hellmayr*

20・Ⅶ・4・Ⅷ・1960（高野）

ヤマガラ　*P. varius varius Temminck & Schlegel*

6・Ⅵ・16・Ⅶ・1960，10・Ⅰ・1961（43羽：高野）；19・Ⅴ・1962～14・Ⅴ・1963；Ⅶ・1965；21・Ⅺ・1965～16・Ⅲ・1966；Ⅱ・Ⅱ・1966（3羽）；28・Ⅰ・1968（本多）；7～12・Ⅵ・1974など。

多くは単独で時折り飛来する。

シジュウカラ　*P. major minor Temminck & Schlegel*

19・Ⅵ（45羽）；4・Ⅶ（51羽）；1960（高野）；Ⅹ～Ⅺ（17～28羽）、1964など。

カラ類中唯一の繁殖種。

メジロ科　ZOSTEROPIDAE

メジロ科（ZOSTEROPIDAE）　1種

メジロの繁殖記録はない。1965年当時は高速道路の工事などで、みることも少なかったが1972年頃より再び姿をみせることが多くなった。2～5羽前後の1群のことが多い。

メジロ　*Zosterops japonica japonica Temminck & Schlegel*

22・Ⅹ・1960（20羽：高野）；10・Ⅳ（18羽）；26・Ⅹ・1961（62羽：高野）；13・Ⅳ・1963；30・Ⅳ・1965（10～12羽の2群）；9・Ⅵ・1969；15・Ⅰ；12・Ⅳ・1970；23・Ⅱ；7・28・Ⅹ，22・Ⅺ・1972（2～4羽）；13・Ⅰ～4・Ⅱ（2～5羽）；19・Ⅹ（9羽）；4・Ⅺ（9羽）；9～20・Ⅲ（4～5羽）；1973；Ⅰ～Ⅶ・1974（1～6羽）；Ⅰ～Ⅲ・1975（1～4羽）など。

記録は多いが、時々飛来するのみで、繁殖はしない。

ホオジロ科　EMBERIZIDAE

ホオジロ科（EMBERIZIDAE）　4種

ホオジロとアオジが、とくに注目される。

ホオジロは1～2つがいと思われ、1巣だけは確認している。武蔵野辺をなわばりの中心としており、時に水生、食草開地域でも繁殖期にみるが、あるいは別個体とも考えられる。

アオジは冬季飛来する長期間滞留の種であるが、個体数も比較的多く、自然教育園としては重要な種であろう。近年も飛来数は減っていない。

ホオジロ　*Emberiza cioides ciopsis Bonaparte*

19～25・Ⅰ・1975（3羽）など。

最高数は3羽。繁殖つがいは1で、巣の確認も1　武蔵野で繁巣することが多い。

研究発表

「本校の愛鳥活動について」

栃木県茂木町立千本小学校　片岡一郎

1. 教育目標とのかかわり

本校の教育目標として「明るく生き生きした子ども」の育成がかかげられ、努力点の中では「自主・自律性を育て情操を豊かにする」ことや「学校と家庭との相互理解を深め、地域社会の実態に応じた特色ある教育活動をすすめる」ことをあげている。愛鳥や緑化によって児童一人ひとりの心が生き生きと明るく、日常生活にうるおいをもたせてくれることを願って、この活動に力を入れている。

2. 活動の推移

(1) 昭和50年３月、卒業生が記録に１人１個の巣箱を作って学校のまわりの木に取りつけた。52年２月より給餌台、水のみ場（かけひ、池の中に止まり木）を作ったが、本校の敷地内に水の出る場所がないのが現状。53年度より児童会で取り上げ、夏休みにも餌になるたね、実、こく類を持ちよること、巣箱や給餌台の増設（学年１台）し、できるだけ毎日給餌活動を全校でやろうと決議された。

(2) 54年度からの活動ー（　）内は活動機関

①野鳥分布図の作成　家のまわりにどんな鳥が飛んで来るかを調査するためにプリントを家庭に配り、記入、まとめと関心を高めた。

②巣箱つくり　中学校へも呼びかけ、中央委員会に協力してもらった。色別の観察の結果はあまり変化がなかった。５、６年生は図工の時間、ゆとりの時間に製作した。（５、６年 中学生）

③校内巣箱展、校内愛鳥週間ポスター展を開き、その中から10点を県へ出品。残りの作品は家庭に掲示する。校内展には賞状も出して励ます。

④校内標語コンクール　廊下に掲示して、賞状も出す。（２年以上全児童）

⑤実のなる木集め　プリントして父兄に呼びかけて（ニシキジ、クコ、ナンテン、ムラサキシキブ、ウメモドキ、ガマズミ、チョウチングミ、バラなど）集める。

⑥水のみ場　体育館の裏の池を利用し、止まり木の増設。（児童会）

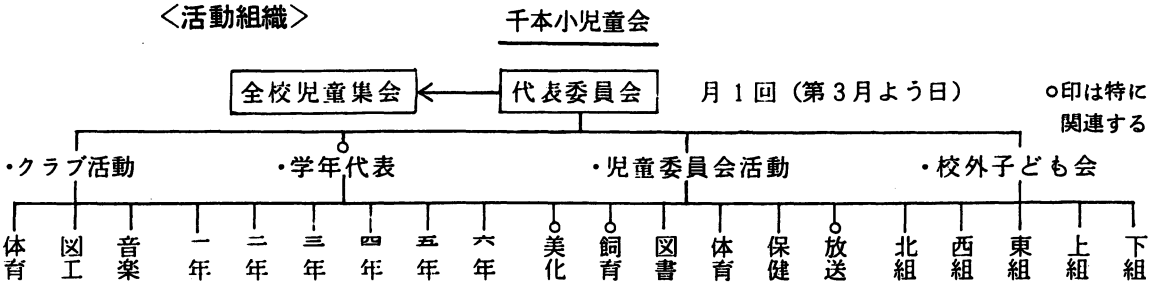
⑦立札　目立つ場所におく。「野鳥は森のガードマン」などと記入。（児童会）

⑧校内鳴き声あてコンクール（児童会→全児童）学期一回、放送部と共催で昼食後に一斉に放送し、その名前を書いて提出させる。１回に10種類の鳴き声で、身近な鳥を中心に聞かせる。

⑨夏休みの研究発表会　一人一人に課題をもたせ、家庭で調査や研究をさせる。９月に発表。（全児童）

⑩餌集め　主として夏休み、冬休み直前にプリントして内容を理解させ、父兄の協力によって集め９月に持って来る。（父兄）

⑪給餌台の利用　主として給食の残り物を、調理室の協力で毎日実行。（全児童）



○児童集会、学級会、ゆとりの時間、委員会活動等を利用して活動している。

⑫野鳥観察日誌　5、6年が毎日、朝や帰りの話合い時に記録。「今日学校へくるまでに見かけた鳥について、場所・名・鳴き声などを書いておく」。(5、6年)
⑬家庭への呼びかけにより関心を高める　町内住民への働きかけとして、P.T.A.新聞、町テレビNVS、町報にだしたり、文化祭で紹介、小中合同の学芸祭で発表。
⑭はい品回収により小鳥小屋を新設。(飼育部)
⑮遠足時の野鳥調べ　双眼鏡を持参して観察。(高学年)
⑯自然保護・動物愛護ポスターコンクールに出品。(県へ　4～6年)
(3)55年度からの活動ー54年度の活動に加えてー
①ラジオ栃木が1月に取材、県内に放送された。
②馬頭小学校より愛鳥に関する訪門をうける。
③学校近くの畑6aを借り受け、カボチャ、トウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモを栽培し、給餌にも使用する。ゆとりの時間を利用して。
④校庭のまわりにカンナとサルビアを植え、菊も1人1鉢を栽培。

野鳥保護活動年間計画

月	活動内容	参加団体
4	○年間活動計画作成（飼育部も同時に） ○保護思想の理解（趣旨の徹底をはかる） ○千本地区野鳥の実態調査	・教師と児童会 ・全　校 ・PTA全
5	○実のなる木を保護者に呼びかけて植樹（学校の敷地に） ○愛鳥週間の内容を周知 ○餌台の修理（一学年一台利用）	・PTA全 ・　〃 ・高学年
6	○校内巣箱・校内愛鳥コンクールと表彰→県出品（各10点） ○動物愛護ポスターコンクール参加（県出品） ○野鳥保護に関する意識調査	・全学年 ・　〃 ・　〃
7	○野鳥の鳴き声あてコンクール（テープを流して） ○一学期の活動の反省と夏休みの研究計画 ○巣箱の観察	・全学年 ・全　体 ・高学年
8	○夏鳥の調査と研究 ○小鳥の餌を集める（全児童・父母へ呼びかけて）	・高学年 ・全児・PTA
9	○夏休みの研究発表会を開催 ○二学期の活動計画　○餌集め（持ちよる）～全般	・中、高学年 ・　〃
10	○野鳥愛護に関する校内標語コンクール（表彰する） ○巣箱の観察	・2～6年全 ・高学年
11	○発明工夫展県出品（餌台・巣箱の工夫） ○冬鳥の調査計画～冬休みを中心に計画	・3～6年全 ・高学年
12	○野鳥の鳴き声あてコンクール（テープによる） ○小鳥の食べ物の研究（学年毎に餌台を利用して）～3月まで ○野鳥について学芸祭に発表	・全学年 ・中、高学年 ・高学年
1	○巣箱の観察　○学年毎に餌台を利用して　○餌集め～全般 ○冬休み中の研究発表	・高学年 ・高学年
2	○巣箱取付と観察 ○野鳥の鳴き声（物まね）コンクール	・高学年 ・全　般
3	○一年間の活動の反省と次年度の計画 ○野鳥愛護作文出品（朝日小学生新聞）	・児童会 ・中、高学年

4. 反省と今後の愛鳥活動

(1)学校教育活動との結びつきを深めるため、計画的、組織的に運営できるよう工夫していく。いつ、どこで、どんな活動を地域ぐるみ…など。

(2)一つの鳥についての研究をしていくことにより愛鳥への意識を高める。

(3)低学年から野鳥への関心を高めていくような方策を考える。

(4)年間を通じた野鳥の観察ー学校だけでなく家庭でも調べる。

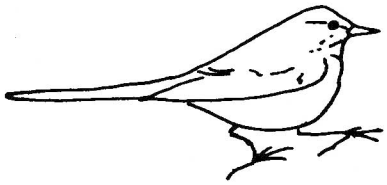
(5)実のなる木の増植・広報活動　町→郡→県内へ。

(6)探鳥会・野鳥学習会の開催ー講師を招いて行う。

(7)巣箱設置の研究　いつごろ、どこへ、どんな鳥のために取りつけたらよいか。「今までのはむだになってはいないだろうか」などを児童とともに研究。

5. まとめ

愛鳥活動を通して得ることは多い。根気、努力、工夫、忍耐も必要であるが、とくに小鳥や自然を心から愛することによって、友だちをばかにしたり、いじわるをしたりしないで、友だちの気持がわかる人になってきつつある。これが人間としての生き方につながると考えられる。しかも、それが本校の教育目標「心豊かな子、明るく生き生きした子ども」という児童の人づくりにもなっていくことを願って、さらに今後も愛鳥活動を学校ぐるみで続けていきたい。



総会報告

まず、下記の通り昭和55年度決算報告が事務局よりあり、監事の江袋先生はじめ、全会一致で承認されました。続いて、常務理事の石橋先生から、「愛鳥教育」の発行その他事業報告がありました。また、昭和56年度事業計画は表の通りです。

緊急議題として、副会長の内、形原北小の田中司校長の中学校転任のため、鈴木新蔵形原北小学校長に交替する案が出され、可決されました。

55年度決算は約50万円の赤字です。また、今年度も「愛鳥教育」を3号作る印刷費が約50万、その他郵送料、通信費として10万、それにひきかえ収入として会費30万が予想されているだけです。

昭和56年度事業計画

5月　第4回研究会・総会
7月　「愛鳥教育」第4号発行
8月　夏期研修（第5回研究会）
10月　「愛鳥教育」第5号発行
11月　鳥獣保護実績発表大会参加
1月　実践校発表（第6回研究会）
3月　「愛鳥教育」第6号発行

この赤字をなくすためには会員を増やすことが一番です。まわりの方に呼びかけて一人でも多く、愛鳥教育を一緒に考えていく仲間をふやしていきましょう。

❖ 昭和55年度 収支決算 ❖

収入 単位：円		支出 単位：円		備考
会費	264,000	印刷費	588,050	「愛鳥教育」1～3号、その他
寄附	18,000	消耗品費	6,650	
連盟寄附	503,780	通信費	129,080	会報配布、ダイレクトメール
		雑費	19,540	角印、ゴム印作成
		次年度繰越金	42,460	
計	785,780		785,780	

昭和56年3月31日現在

56.5.30

意見交換会の記録

意見交換会には15名が参加して、会の方針や、教材開発にもっと力を入れて、どのようなものを作るかなど具体的な話も出ました。まず、自己紹介から始まり、「愛鳥活動から、教課へ取り入れる時点で、問題点、困難が多かった」「まず活動のきっかけとなるものが必要ではないか」「今年は鳥のフンを調べていく新しい試みを考えている」といった活発な学校から「まだまだスポーツクラブが盛んで自然に目を向けた活動が少ない」「これから、活動を始めたい」という様々な現場の先生方が混った会となりました。

◎定期的研修会について

「先生方を対象とした研修会を定例として、月一回程度設けたいが、連盟の観察会などを利用したらどうか。」

「ＰＲの方法を考えないと集まりが少ない。」

「場所は、軽井沢あたりで開いても、普段の活動に結びつかないので、東京地区だったら、高尾山といった場所の方がよい。」

◎教材について

「市販のものでは、学研とか福音館とかあるが児童にもたせるには高いので、パンフレットのようなものでよいが、小学生３～４年ぐらいを対象とした、大きな絵ののっているものがほしい」

◎会員制度について

「現在、学校などの団体会員と個人会員の二つになっているが、先生個人で加入している場合、校長の理解が得られないと研修会に参加しにくい。そこで、加入は個人でも学校加入の学校会員制という形をとれば、先生方も参加しやすいのではないか。」

「案内を学校長宛、先生派遣依頼という形で出すようにしたらどうか。」

◎愛鳥モデル校、鳥獣保護実績発表大会について

「発表大会などに参加するには、モデル校でなければとか、実績がないので参加しないといった学校が多いのでは。」

「資料なども実際に活動しているが、モデル校でない学校には手に入らないなどの実態もある。」

「県段階での発表大会を開いているところがあるが現状が把握されていない。会としては調べていきたい。」

「実績大会の名称も、自然保護とか愛鳥活動といった印象が薄いので、学校側に理解されにくい。」

◎夏期の研修会について

「地方での活動を活発にするために、年一回は地方での研究会をもちたい。」

「夏期休暇中が参加しやすいのでは。」

「今年は愛知県が候補に上っているが、３ケ月は準備期間としても、PR 時間も足りないので、来年にしたい。」

「今年は、鳥の研修ということで合宿形式の講習会を実施する。」

「先生方に鳥について研修してもらい、会でも指導員グループを養成して、学校の先生同士で講師・探鳥指導者を派遣しあったりする仕組を作ったらどうか。」

◎文部省への働きかけについて

「愛鳥活動に“ゆとりの時間”といった教課以外の時間を利用している学校が多いが、文部省の担当に働きかけて、学校教育の中へもっと取入れるよう努力したらどうか。」

「文部省には、会顧問の蛯谷氏を通じて働きかけたい。」

◇夏期研究会のお知らせ◇

愛鳥教育研究会では夏期休暇を利用して、愛鳥活動の基本となる鳥の見分け方について１泊２日の予定で研究会を開きます。初日にカラースライドやテープを使って見分け方のポイントや指導のいろいろな方法について勉強し、翌朝の探鳥会で実際の鳥を見ます。次の日午前中には、本町小、福生５小の活動の発表もあります。詳しくは下記の通りです。お誘い合わせの上、きそってご参加下さい。

－第５回愛鳥教育研究会－

日時：昭和56年８月19、20日

場所：御岳山ビジターセンター

日程：８月19日午後1時集合「鳥の見分け方」

　　20日・探鳥、研究発表、意見交換会

参加費：5,000円（宿泊費含む）

申込：往復ハガキで７月25日迄に研究会へ

◇ 研究会に参加して ◇

蒲郡市立形原北小学校　渥美守久

われわれのこの研究会も会員130名余となり、生まれて一ケ年目を経過しました。全国各地に広がる仲間が一堂に会することの難しさを今回の総会で考えさせられました。また、発表校の千本小片岡先生の「愛鳥・緑化によって児童一人ひとりの心と日常生活にうるおいをもたせてくれることを願ってこの活動に力を入れている。」と言う、地道で気負のない発表に感銘を深くしました。

私も国語の学習の中から愛鳥活動を始めた手さぐりの時期がありましたが、当時、巣箱をかけないと愛鳥活動ではないとさえ思われる時で、山間部の小規模校ばかりの中、都市化のすすむ町でこそと、愛鳥活動の大切さを訴えて、発表大会に参加しました。このように私の経験からも、仲間や組織に新しく入る時の不安やためらいを、この愛鳥教育に当てはめてみる必要があると思います。

まず、学校が参加しやすいように、各県の教育公報に紹介されるような文部省サイドからの筋道を通せないものかと思います。教育委員会を経由した形の催しや研修会は各校でスムーズに処理され、先生方も参加しやすいものとなるでしょう。「愛鳥教育」ともなれば、完全に教育的側面からとらえる活動であり、今後の学校教育の新しい分野であるし、多くの教師が参加することに希望がもてると思います。

教育の中に位置づけた好例として、二子玉川小の「豊かな人間性の育成」をテーマとした、全校体制で全教科に愛鳥自然愛護の内容を取り上げた公開授業の記録は目をひきました。それは愛鳥自然愛護の教育的理念が学習全般に貫けるだけの高いものであることの立派な証明だと思います。

スズメやツバメから出発すれば全国どこの学校でもやれるのです。愛鳥教育が鳥類だけの専門研究にならないように、子ども主体の日常的でやさしい、自然との接し方であってほしいと思います。

長年、かわりばえのしないことの多い、日常の教育実践の中に、新しい感動の教育的分野をわれわれの手で広げて行きましょう。この機関紙を通し、どしどし全国各地の楽しい活動や、悩みなども交換しあえることが大切だと思います。

犬山市立今井小学校　山本尚三

本校では、地の利を生かし、早くから地域の自然を生かした自然教育活動にとりくみ、その一環として愛鳥教育に力を入れてきた。

本校で行っているような自然教育や愛鳥教育は教育活動全体からみると、まだまだ特殊な活動で教育活動に占める比重も小さい。したがって、指導理論なり指導法なりを身につけている教師も少ない。本校は児童数90名のいわゆる小規模校であるが、こうしたことから長年の蓄積を生かしきれなかったり、指導力の向上が図りにくいなどの問題をかかえている。そのため、研修の必要を強く感じている。

こういうことで、今回の研究会に参加したのであるが、自然の総合的な把握や、観察学習が時代の要請であることを学ぶことができ有意義であった。また、自然教育園の施設を見、自然教育の専門家に指導を受けたこともよい経験であった。実は、学校裁量時間の運用にあたり、本校の従来からの自然教育活動の充実と発展を図るべく努めているところで、さっそく、今回学習したことを生かしていきたいと思っている。

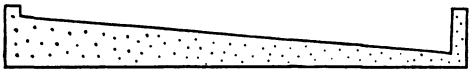
最後であるが、本校としては、愛鳥教育研究会を当面教師の指導力向上のための研修の場として位置づけたいと思っており、その方向で会が充実発展していくことを願っている。

園内実習に集まった人

バード・バス（野鳥用給水器）の作成の注意(1)

日本鳥類保護連盟　柳沢紀夫

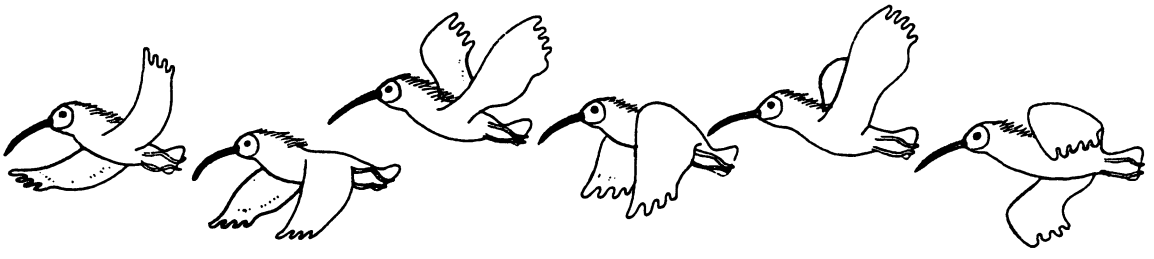
生物にとって「水」は生命そのものといえるくらい大切なものであることは、ご承知の通りです。野鳥たちにとってもそれは当然です。野鳥たちは、水を、「飲む」だけでなく、例えば寄生虫を洗い落したりといった「身体を清潔に保つ」ために使いますし、暑い折などはぬらして体温を下げるような「体温調節」に使ったりと、いろいろ役立てています。それほど大切であるにもかかわらず、鳥が安心して利用できる水はとても少いのです。流れが急すぎたり、早すぎたり、また深すぎたり、外敵が多すぎたり、といったことが多いのです。雨あがりの水たまりで、スズメが水浴している、といった場面に出合った方も多いでしょう。鳥のための水は少いのです。



給水台の模式図

ある地域において、野鳥の個体数を制限している要因としては、食物、水、避難場所、が考えられます。この中で最も手間がかからず、しかも効果がはっきりしている「水」を鳥たちに与えることは、巣箱や給餌台を設けてやるよりも前に行ないたいと思われますし、与えがいのあることと思われます。

深　さ　野鳥は、自分の身体全体を水に沈め、水浴することはありません。ほゞ脚の長さくらいの深さの場所に立ち、腹を水につけ、翼を動かして浴びる、というのが一般的です。だとすると、10cmも15cmもある必要はないのです。設置場所の近く（例えば学校内とか）ではどんな鳥が見られるか、ということを一応は調べておく必要もありますが、利用する鳥を考えると、日本ではスズメぐらいの大きさかそれよりも体の小さいものが多いし、ムクドリ、ツグミくらいの大きさのも、その上はハトくらいの大きさのもの、を考えればだいたいよいでしょう。スズメ級の鳥には深さ1～2



納入先　〒150 東京都渋谷区南平台町8－20
（財）日本鳥類保護連盟　内
愛鳥教育研究会

cm、ムクドリ級では2～4cm、ハト級でも3～5cmもあれば十分です。思ったより浅くてよいことに驚かれることでしょう。「飲む」ためならば深くてもよいのですが、せっかく作って水を与えるのならば、「水浴」できるようにしてやるべきでしょう。そして、多種類の鳥に利用させるには、底に傾斜をつけて、それぞれ好みの深さを水浴ができるよう配慮をしておけばよいでしょう。一番深いところで5cmもあれば十分です。

大きさ　どんな場所に設けるか、といったことで大きさは自由ですが、最小としては30cm四方くらいの水面は必要でしょう。ところで学校などに設ける場合は、これが鳥の水浴場であることを全員に知らせる意味も含め、1㎡～5㎡くらいのものでもおかしくありません。しかし、それ以上のものは不要と思われます。それよりも別の離れた場所へ同程度のものを作ってやった方が、鳥にとって役立つでしょう。一ケ所では、そこが利用できない場合は逃げていくしかないからです。

（以下、次号につづく。）

第4号目次

第4号によせて…… 会長・田村活三(1)
第4回研究会報告
講演「自然教育園の鳥」自然教育園・千羽晋示(2)
発表「本校の愛鳥活動について」
茂木町立千本小学校・片岡一郎(4)
総会報告…… (6)
意見交換会記録…… (7)
研究会に参加して…… (8)
バード・バス作成の注意（1）
日本鳥類保護連盟　柳澤紀夫(9)

編集後記　総会報告のところでもお願いしました会員勧誘のために「愛鳥教育」のバックナンバーを必要な方は御一報下さい。2、3号および4号が用意してあります。また、今年度分会費がまだの方は同封の振替用紙をご利用の上、お納め下さいますよう、お願い致します。

愛鳥教育　第4号

昭和56年7月1日発行

愛鳥教育研究会
〒150　渋谷区南平台町8－20
日本鳥類保護連盟内
TEL　03－461－0540
郵便振替　東京2－92041

……（きりとり線）……

入　会　申　込　書

愛鳥教育研究会の趣旨に賛同し、会費二千円を添えて、入会いたします。

年　　月　　日

申込者　　個人　団体（○をつけて下さい）
氏名　　㊞
住所
電話

申込者の所属、職業
勤務先の住所、名称
電話